



# 華胥の櫻、墨染の君

---

*Frontline of Perfect Cherry Blossom.*

## 〔序〕

鳴鳩めいきうもその羽を払う四月の末。冥界にも遅い春が訪れる。

麓より続く長い階段の両隣を埋める桜の木は千を超えて万に迫り、罪なき白に彩られた花を咲かせていた。彼岸の園で転生を待つ多くの幽霊たちも、咲き散る桜の中にふわふわと漂いながら遅い花見を楽しんでいる。

しかし、そんな賑わいからも遠く離れた二百由旬の庭の片隅に、彩りの抜け落ちたような空隙があった。

萌え出づる草木もそこだけは近寄らず、春の訪れすらも寄せ付けまいとするように肌寒い風が満ちる。

その中心には、四季の巡りからも取り残されたような、一本の古木があった。

——西行妖さいぎょうあかし。

数年前、幻想郷から春の訪れを奪う異変の契機となった、樹齢千数百年の古桜だ。かつて一人の歌聖を死へと誘い、以来千年以上にも渡って、その幽玄の美しさにて多くの生者を惹き寄せ、死に至らしめてきた木霊こだまである。

死を招くその性質ゆえ、厭われ嫌われ、頭界から彼岸の地へと追いやられて。西行妖は今年も変わらす朽木のように乾いた枝だけを空に広げていた。

そして今。そこには春雪異変のもう一つの要因となったものの姿がある。

空色と紫の着物に身を包み、憂いを含んだ表情で巨木を見上げるのは、冥界の管理人にしてこの白玉楼の主、西行寺幽々子。

一見人とは変わらぬ明瞭な姿かたちをしていても、辺りを漂う霊の気質は隠せない。天冠を模した帽子からも分かる通り、彼女もまた既に彼岸の者である。

幽々子は西行妖の傍に歩み寄ると、物言わず聳える妖怪桜の幹に手を添え、そつと目を閉じ額を触れさせた。

静かな風が吹き、細い枝がひゅうと揺れ、季節外れの虎落笛もがりぶえを奏でる。

「——」  
少女の形の良い小さな唇が、かすかな吐息に震える。

同時、ゆるゆると開かれた幽々子の手のひらから、青い輝きがこぼれ出した。ほどけた幽々子の白い指の先に、一頭の蝶が生まれ出で、はらりと翅を震わせる。

薄く透け光る青い燐粉を溢れさせながら、蝶は少女の指から飛び立った。翅を広げるのは一頭だけではない。二頭、三頭と翅を揺らす青い輝きが、西行妖の周囲を取り巻いてゆく。

華胥の国、胡蝶の夢のごとき壯麗で美しい光景。

しかし、そこにはあまりにも静寂に死が満ちていた。

無数の死を、終焉を運び舞う蝶の群れ。

もしこの場に生者が迷いこめば、この世のものと思えぬ光景の美しさに目を奪われ、魅入られながら静かに事切れてゆくことだろう。

あるいは——こここそが。死者の園、冥界の本当の姿なのかもしれない。

幽々子にもまた、人を死へと誘う能力がある。魂を運ぶ蝶はその象徴であり、それこそが彼女が冥界に住み、成仏することなくその管理を任されている理由なのだ。

己と同じ力を持つ桜の傍に、華胥の亡霊はそつと寄り添う。

永劫の時を共に過ごした伴侶に身を委ねるように、幽々子は穏やかな笑顔で眼を閉じた。

四季彩り鮮やかな白玉楼の庭の中、ここにだけは命の芽吹く春の彩りはなく。

ただ、喪うことだけの悲しみに満ちた、墨染があつた。

——かさり。

木々の隙間に幽かに揺れる気配を感じ、幽々子は物憂げな瞳をそちらへと向ける。

「——、」  
亡霊の少女が口にした名は、群れ飛ぶ蝶翅の燐光の先に掻き消えて行つた。

## 【一】

「……………」

太めに縫り合せた芯から赤く立ち昇る炎に、慎重に鋏を差し入れる。

蜜蝋の赤い炎が刃の表裏を炙るのを確認してから、魂魄妖夢は刃先を火から引き出し、傍らの桜の幹へと向き直った。

半霊と共に樹の枝上へ浮かび上がり、あらかじめ見当を付けておいた枝へ鋏を向ける。

「ん……………」

片目を閉じて背中を反らし、矯めつ眇めつ。左右から枝張りを確認してから、意を込めて刃を閉じる。

無惨に折れた枝が、根元からぱちんと切り落とされて地面に転がる。むき出しになった切断部に病気が入らぬよう、腰の墨壺から濃く擦った墨を塗ってゆく。

ぱちん、ぱちん。

時折距離を取って枝の形を確認しながら、妖夢は慎重に折れた枝の剪定を続けた。

桜は手入れの難しい樹だ。桜折る馬鹿梅折らぬ馬鹿とも言われるように、迂闊な扱いが原因で樹全体を腐らせることも少なくない。その扱いには細心の注意を要する必要がある。最後に落とした枝をまとめて縛り、妖夢は大きく息を吐く。

「…………ふう」

わずかに上気した頬に、薄くのこる泥の痕。作業着の袖をまくりあげて、白玉楼の庭師は額の汗をぬぐう。

昨夜の風で、桜もすっかり散ってしまった。間もなく春も過ぎ、やがて夏が来るのだろう。隣で半霊に抱えさせた籠の中に鋏と園芸道具を放り込み、妖夢はぐつと背を伸ばした。

「んんっ……………」

冥界の庭は果てなく広く、小さな庭師が毎日朝から晩まで駆け回っても尽きることはない。一つの区画を整えたと思った頃には以前に手入れを済ませていた場所がすっかり荒れてしまっていることも少なくなかった。

「…………師匠は鼻歌交じりでこなしていた気がするんだけど」

うんざりと溜息をついて、妖夢は果てしなく続く伸び放題の垣根を見やった。

白玉楼の先代庭師を務めていた祖父——魂魄妖忌の仕事ぶりを思い出そうとして、妖夢は軽く頭痛を覚える。

幼い頃、師を手伝って植木の枝を落としたり、岩の苔を整えたりした経験がない訳ではないが、妖忌がこの広大な二百由旬

の庭を、常日頃、いつたいどうやって管理していたのか、改めて考えてみるとまったく解らないのだ。

ひとことで庭師と言っても、その仕事は多岐に渡る。植木その他にも地面の石畳、垣根の手入れ、砂利を敷いて岩を並べ、苔を置いて灯籠を整える。……教え上げても切りがない。

さらに妖夢の場合、西行寺家の剣術指南役という立場もあり、その役目はなぜか白玉楼の家事やら掃除やらにも及んでいた。

しかし妖夢の記憶にある師の姿は、縁側でのんびりと寛いで爪を切ったり茶を飲んだり、小枝一本でからかい半分に稽古に付き合ってくれたりという、暢気なものばかり。

それなのに、白玉楼の庭はいつも瑕疵なく整えられていた。

「——最近、師匠に聞きたいことばかり増えていく気がする」

ここにはいない師の姿を想い浮かべ、軽い苦笑と共に、半人半霊の庭師は止まっていた手を動かし始めた。延びた垣根の枝を落とし、混み過ぎた葉に鉢を入れてゆく。

(……前はこんなことなかったのに)

妖忌がふらりと白玉楼を去って、もう何十年が経つだろう。

右も左も分からぬままにその後を継ぎ、妖夢はただ我武者羅に毎日进行してきた。師と同じように庭を走り、手入れをし、主の我儘に付き合い、剣を振るう。

そうすればいつか、あの背中に追いつくことができるのだろうと——昔はそう、無垢に信じていた。

しかし。日々を過ごし、修練を重ねるたび、これで良いのかと不安が胸をよぎる。枝の形、砂利の引き方、見様見真似で繰り返しながら続けてきたことが、揺らぎ始めているのを妖夢は実感していた。

「未熟だったってことなのかな。……今もだけど」

剣の扱いも同じだった。

何も考えず、出来不出来を考えずにただ真似をするだけならば、容易いことなのだろう。

だが、庭師の肩書きも、剣術指南の役目も、いまは妖夢自身のものであった。妖夢の行いはもはや『真似』では済まされない。

だが、どうすれば良いのかと、教えを請える相手がいないことが、時折酷く頼りなく感じられるのだ。

それでも、弱音は吐いていられない。せわしない毎日の中で、庭師の日々は慌ただしく過ぎてゆく。

それでも、自分にも幽々子にも、なにも言わずに去っていつてしまった師に、文句のひとつも言いたくなるのは仕方ないことかもしれない。

いつの間にかまたふと呆けてしまっていた自分に気付き、妖夢は頭を振った。

「——いけない、どうも余計な事ばかり考えてる」

べちべちと頬を叩き、気合いを入れ直す。

こんな風に思い悩む理由は明白だった。

数日前。蔵の整理をしていた妖夢が、躓いてひっくり返した古い行李から偶然見つけてしまった冊子のせいだ。

日に焼け、埃に汚れた冊子は、妖忌が雑記として使っていたものだった。当時の買い出しのメモや用事の走り書きのようなものから、詰め碁の手筋、暇潰しに捻ってみたのであろう歌（しかも物凄い下作である）、幽々子への愚痴めいた独白、是非曲直庁に務めている友人への借金催促の下書きまでが赤裸々に残っており、孫としてはなんとも対応に困るシロモノだったのだが——その中に何気なく記されていた一節は、妖夢を驚かせるには十分なものだった。

——そろそろ西行妖の剪定をせねばならない。

妖忌がここを去って以来、白玉楼の庭は妖夢に任せられている。しかしながら、妖夢はこの数十年、一度も西行妖に鉢を入れたことはなかった。

いや、触れるどころか近づくことも無意識のうちに避けていた。幽々子の言いつけで春を集めた時でさえ、距離を置いて眺める以上のことはしていない。

妖夢の知る限り、師もそれは同じはずだった。だが、

（師匠は、あの桜に——鉢を入れていたんだ）

その事実、妖夢にとって少なからぬ衝撃を与えていた。

”西行妖を咲かせてはならない”

それが白玉楼の庭師のつとめである。春雪異変のあと、境界のすきま妖怪、八雲紫は直々に妖夢を呼び出して、執拗なほどにそう念を押した。

彼女と幽々子、そして西行妖がただならぬ関係にあることは、おおよそ妖夢にも想像はついている。

あの古桜を要として結ばれた、余人には立ち入ることのできぬ深い絆。それが一体何であるのかについて、興味を抱かないと言えば嘘になる。だが、従者の身でそれに立ち入るのは良くないことなのだと——妖夢は努めてそう考えようとしていた。

けれど——

（師匠は、それを——）

「妖夢？ ようむ？」

「みよんっ!？」

名を呼ぶ主の声に、妖夢は思わず鉢をとり落としそうになる。すんでのところでの踏みとどまり、振り返れば縁側には白玉楼の主、西行寺幽々子の姿があった。

ふらふらとした足取りで（幽霊だから落ち着がないのはいつものことだが）眠そうに眼を擦る。

妖夢は慌てて鉢を下ろし、頭を下げる。

「お、お早うございます、幽々子様」

「ん、今日も早いねえ」

おはようというには随分遅い時間だったが、幽々子はそれでもなお眠そうに眼を擦ってふわあと大きく欠伸をした。まったくもって行儀の良くない姿だが、不思議と咎める気にはなれないのは、やはり仁徳ということなのだろうか。

「んー……」

どこか寝惚け眼で、幽々子はついと手を伸ばし、近くを漂っていた妖夢の半霊をむぎゅと掴む。

「ひゃんっ!?」

いきなりのくすぐったさに妖夢は跳ね上がった。半人半霊の名に恥じず、半霊と人の部分はどちらが本体と言う訳でもなくどちらも等しく妖夢である。無防備なところを掴まれればくすぐったいのは当然で、

「あむっ」

「幽々子様！ た、食べないでくださいっ!!」

妖夢の叫びも半分は聞こえていないのか、いまだ夢うつつのまま、幽々子はふよふよとした半霊を抱き締めるように顔をうずめ、ぱくりと口を寄せた。

「ひあっ!? やあ、う……」

己の半身を甘く噛まれるくすぐったさに、妖夢は顔を赤くして叫ぶ。

「ゆ、ゆゆこさまっ!!」

「だって、なんだかふわふわして美味しそうなんだもの。こん

なに大きな半霊を何のために付けているの?」

「非常食のためじゃないですか!!」

食いしん坊の亡霊の手から逃れようと盛んに尻尾を振る半霊を引き寄せ、妖夢はようやく自分を取り戻す。

「はあ……もう、何をするんですか、一体!!」

「お腹が空いたのよー」

息を荒げながら眉を立てるが、主はいつもの通りどこ吹く風だ。扇を広げてひらひらと手を振って見せる幽々子に、妖夢は短く息を吐いた。

「ご飯にしましょうか。すぐに支度します」

「……そうね。ああ妖夢、今日のお昼はお蕎麦が良いわね」

「はい」

朝食の話をしたつもりだったのだが、幽々子の心は既に昼の献立に飛んでいた。白玉楼の主の健啖ぶりは幻想郷でも有名なほどで、死者だというのに生者以上によく食べ、健康的な生活を送っているのだ。その暢気な姿は、妖夢ですら時々彼女が既に彼岸の住人であるということを忘れさせるほどだった。

——けれど。

脳裏をよぎるいびつな冬の残滓。枯れかけた古桜、舞い散る青い蝶の群れ。春から取り残された墨染めの風景。

形にならない不安に衝き動かされ、妖夢は幽々子の背中を呼びとめてしまう。

「……あの、幽々子様」

「なあに？」

ふわり、いつもの笑顔を見て、妖夢は喉元まで出かかった言葉を、呑みこんでいた。

「あ、いえ。その……」

なんでもありません、と小さく俯く妖夢に、幽々子はヘンな子ねえ、と呟いて、鼻歌交じりに部屋の奥へと戻ってゆく。

……いまでも、西行妖を咲かせたいと思っていますか？

言葉にできなかった問い掛けが、妖夢の胸の奥にちくりと刺さる。



## 【一】

「毎度ありい」

研ぎ屋の親父に見送られながら店を出る。研ぎ上がった植木鉢を脇に抱え、受け取ると、妖夢は店を出た。

「よつ、と」

半霊の上に風呂敷包みを載せ、肩に大きな籠を背負つて。人里の道を歩き出す。気付けば大分陽も傾き、道行く子供たちの影も長く伸びていた。

「すっかり遅くなっちゃったな」

賑わう人里の商店街、いつもの買い出しの格好で歩く少女は、一種の風物詩だ。遠く物珍しげに眺める視線もある中、妖夢は小山のような荷物を抱えて歩いてゆく。

「……今日はいいい干物が入ったから、あとは……」

冥界の住人もその暮らしぶりは生者のそれと何ら変わりはない。自給できないものについてはどこかで求めなければならぬ。多くはこまごました日用品や嗜好品、道具などだ。

冥界と地獄にちかい中有の道にもいくつもの店があり、生者

にも死者にも人間にも妖怪にも等しく門を開いている。が、その多くは死した魂が生前の業を償うために始めたもので、どちらかと言えば茶店や食べ物屋が大半である。

と言うのも、彼等は輪廻を決められた霊だけに、物に強く執着を持つことは好ましくないという事情があるのだ。そのため中有の道では、職人や細工師などは滅多に見られない。そうしたものを求めるには人里に足を伸ばすしかないのだった。

「おー。今日も精が出るねえ」

「……？」

「——こつちさ、こつち」

呑気な声に視線を上げれば、茶店の椅子でくつろいだ様子の赤毛の死神が一人。彼岸の死神、小野塚小町は団子の串を口へと運び、ひらひらと手を振ってみせる。

すでに昼休みと言うには明らかに遅すぎる時間だというのに、どつしり構えた様子は貫録十分。その堂に入った様は、まるでそうしてそこでサボっていることの方が正しいのだとも言わんばかり。

「奇遇だねえ、こんな所で」

「……どう見てもそうは見えませんが」

明らかに顔見知りを通るのを待っていたとしか思えず、半眼になつて見つめる妖夢だが、しか小町はどく吹く風。

「まあまあ、そんな邪険にしなさんな。あたいん所とお前さん

のそこは、お隣サンみたいなんじゃないか。ちつとは仲良くしたって罰は当たらんたる」

「いえ、ですが」

お使いの途中なので——と言いかけた妖夢だったが、小町はそれを遮って茶店の奥へ声をかける。

「おばちゃん、追加頼む」

「はいな」

気付けば目の前には新しい桜餅を載せた皿があり、淹れたばかりのお茶まで用意されている。茶店の店主らしき老婆は、にこにこ座布団を示していた。

「ほら、遠慮しなさんな。割り勘なんて吝嗇臭い<sup>けちくさ</sup>ことは言わないからさ」

「……では、少しくらいなら」

こと、商売に関しては生きている人間の方が上手であるらしい。死神ですら差別なく客に迎えている店主に半ば呆れ、半ば感心しつつも妖夢は小町の隣に腰を下ろす。

「頂きます」

丁度、小腹が空いていたのも確かだった。

妖夢は手を合わせ、桜餅へと手を伸ばす。店主が進めるのも確かで、桜餅は見事なものだった。程よい甘さの餡が薄く塩味の付いた桜の葉と合わさり、その風味はなかなかのものだ。

あとで幽々子様の分も買つていこう、と思ひながら湯呑みに

口を付けた妖夢だが、その渋さに軽く眉を潜めて舌を出してしまふ。小町はそれを見て小さく微笑み、

「いやあ、一人じやいい加減退屈だね。そろそろ話し相手が欲しかった所なのさ四季様は出来た人だけど、どうも下つ端の苦勞に理解がなくてねえ」

「サボりと休憩は違う氣がしますが」

「……むう。四季様みたいな事言わないでくれよ。ささやかな楽しみじゃないか」

小町はそうばやくが、妖夢にしてみればこの部下にしてこの上司ありだ。もつとも、こうしてやけに人間臭い彼女だからこそ、小野塚小町は死神という忌み嫌われる存在ながら、多くの者に慕われるのだろう。

「で、まあここで寛い<sup>くろ</sup>でたら、やけに不景氣な顔してお前さんが通りかかったと、そう言う訳さ」

「そ、そうですか？」

思い悩んでいるのは確かだが、顔に出しているつもりはなかった。思わず頬を引っ張つてみたりする妖夢に、小町は苦笑いしつつ団子の皿を片づける。

「……やれやれだ。商売繁盛も結構だけど、仕事ばかりじゃ息が詰まるってもんだね、お互い」

「ええ、まあ」

さりげなくサボり仲間に混ぜられているあたりに引つかかり

つつも、妖夢は曖昧に相槌を打つ。地獄の景気の良さについては、果たして同調していいものかどうかという疑問もあったが、さて置くべきだろう。

そんな様子だから、なにげなく小町が口にしたその台詞は、まったくの不意打ちだった。

「なあ妖夢。もうこれ以上、あの化物桜に関わるのはやめな」  
「むぐっ……」

動揺を押し隠す余裕もなく、喉に詰まりそうになった団子を無理やり飲み下し、妖夢は出来る限りの平静を装って答える。

「……どこで、それを？」

「あんなにあちこちで訪ね回ってりや、知ってくれって言うてるようなもんさ」

団子の串をびしと妖夢の前に着き付けて、小町は不適な笑顔。確かに西行妖と妖忌についてはここ最近の妖夢の気がかりであり、紫や霊夢達にもそれとなく探りを入れていたのはその通りなのだが——それが死神の聞き及ぶ所になっているとは、まったくの予想外だった。

「願わくは花の下にて春死なん——か。大概厄介なシロモノになっちまったねえ。あれも」

「……」存じだったんですか」

妖夢が問えば、小町はあっさりと頷いてみせた。考えてみれば閻魔の直属の部下である死神が、冥界の最重要項目である

幽々子や西行妖について知らないという方があり得ないことだ。「あれは顕界に置いておくにや物騒すぎるよ。死狂いの桜なんてろくなモンじゃない」

「そんなことはありません。西行妖のことは幽々子様もちゃんとご存知です。なにか、お考えがあつて——」

西行妖の危険性を指摘する言葉ではあつたが、間接的に幽々子までけなされたような気がして、妖夢はちんちんとなって言い返す。が、小町はびしやりとその反論を遮った。

「参ったねえ。氣付いてないのかい」

がりがりと後ろ頭を掻き廻り、嫌な顔をする小町に、意図が掴めぬまま妖夢は目をぱちくりと瞬かせる。

「あれに囚われてるのは、幽々子じゃない。……あんた自身の方だよ。妖夢」

「え」

呆氣にとられる妖夢の前に、小町はいつになく真剣な顔をみせる。

「考えてみな。徒<sup>いたずら</sup>に人を死に招く化け物桜に拘って、一体全体何がしたいんだい？ およそ真つ当な生者からすれば、お前さんのしようとしていることは常軌を逸してるんだよ。

人の生き死にはあたい達の領分だ。それを勝手に侵すつてのは、宜しくないね」

「……私は、半分は幽霊です」

「残りの半分は人間だろう。あの妖怪桜の側に居続けて、自分が狂つてないと言い切れるかい？ 言っちゃ悪いが、お前さんはそう言うのに弱そうだ」

小町の指摘は正しかった。永夜異変の折、月の頭脳によつて暴かれた真実の月を目にした妖夢は、その狂気に当てられてしまった経験がある。

「……この分じやお前さんは遠からず半人半霊から霊人全霊の仲間入りだ。悪いことあ言わないよ。あの桜の事はしばらく忘れておくこつた。あたしも仕事とはいえ、知り合いの魂を運ぶのはあんまり好きじゃないからね」

きつと小町はこの忠告のために、妖夢を待つていたのだろう。一度は躊躇い、けれど再度迷いを振り絞つて。妖夢は隣に座る死神の顔を見る。

「……たとえ力が及ばなくても、お役目に力を尽くそうとするのは——間違っているんでしょか」

「……世の中、身の丈に合わないことまでやろうとすると、どうしたつて無理が出るもんさ。余計なものまで背負い込んでると、あなたの爺さまみたいになつちまうよ」

「——お祖父ちゃ——師匠を知つてるんですか!？」

「ああ、顔馴染みだよ。昔は良く一緒に賭場なんかにも行つたっけねえ」

初耳だった。驚く妖夢に、小町は懐かしそうに微笑んで、頭

の後ろで腕を組む。

「居なくなつたつて聞いた時は驚いたけど、……どこか納得もしたよ。あんたがなにも聞かされてないつてことは、妖忌はあんたにあの桜に関わつて欲しくなかつたつて事さ。……知らないことに引け目を感じる必要はないんじゃないかね」

「ですが……」

「焦らない焦らない。一休み、だよ」

立ち上がりかけた妖夢の頭に、ぼんぼんと優しく手のひらが載せられる。

「まだお前さんは若いんだ。もつとじっくり余裕を持つて、悩むのはそれからでも構わないだろう？ 噂じゃ鬼でさえ一目置いてるつて腕前なんだ。研ぐ前から植木鉢代わりにしちまうのは勿体ないんじゃないかねえ」

「……………」

赤毛の死神が諭す言葉はもつとも思えたものの、じつとしているとなにかを言い返してしまひそうで、妖夢はむぐむぐと桜餅を口の中に詰め込んだ。

## 【二】

陽の落ちた白玉楼の中庭で、鋭く剣が振るわれる。

薄闇の中、道着姿の妖夢は、一心不乱に剣の型取りを繰り返していた。

師が遺した庭師の双剣を己のものとするため始めた日課の鍛錬だ。日に三千と決めて始めた素振りには、歳月と共にその数を増し、今では一万を数えるようになっていく。

夜気を斬り裂く白刃が踊り、月明かりを照らして輝く。舞い踊るように煌く銀の剣尖は、眼にも止まらぬ速さで振るい続けられる。

(……………つ)

が、その動きはどこかちぐはぐでぎこちないものだった。熱を帯びた吐息が、少女の嚙み締めた奥歯の隙間から洩れる。

言いようのない焦りのようなものが妖夢の胸の奥に燦り、剣先に乱れを呼んでいた。

(いけない……)

集中が途切れかけているのを感じ、妖夢は雑念を振り払おう

と、更に速度を上げた。が、迷いを胸に残したまま、無理に修正を試みたせいで却って無駄な力が入り、刃筋の乱れはさらに大きくなる。手首の筋に、鈍い痛みが走った。

刃渡り四尺三寸、柄尻まで含めれば六尺近い大業物だ。たゆまぬ修練を重ねたとて、本来、妖夢の体格では扱い切れぬ代物である。いまだ伸びきらぬ少女の手足で無理をすれば、身体を痛めるのは必然だった。

「痛……っ」

手首の返しに伴う鈍痛に眉をしかめ、しかし妖夢はなお手を止めない。胸の内の焦燥に衝き動かされるまま、遮二無二剣を振るい続けた。

だが、そんな無茶が長く続くはずもない。地面すれすれに落ちた楼観剣の切っ先が砂利を擦り、大きく刃筋をぶれさせる。勢いのままに泳いだ長刀は、不様に空を掻き、近くにあった桜の枝へと喰い込んでしまう。

緩んでいた指から柄がもぎ取られ、妖夢はそのまま砂利の上へと倒れ込んだ。

「——ッ、はッ、はあ、っ、はあッ」

ぜいぜいと呼吸が乱れ、全身からどっと汗が噴き出す。身体は蒸気を噴きそうに熱く、鼓動が早鐘のように高鳴っていた。玉のような汗の滴が細い顎を伝い落ち、地面に散ってゆく。

肩で息をつきながら、妖夢はふらつきそうになる脚に喝を入

れ、近くの大岩に背中を預けた。

全身に余計な力が入ったまま、無駄な動きを繰り返したため、身体は焼け付くほどの熱をたぎらせる。

——駄目だ

雑念に塗れた己の剣に、荒い息の中、妖夢は拳を握りしめる。極限まで無駄のない動きをすれば、身体にかかる負担も最低限のものとなる。

あらゆる雑念をうちはらい、己が身ひとつをひと振りの鋼とし、一念入魂の剣と振るう。地底の鬼との戦いで掴んだはずの理合は、砂がこぼれるように指の間をすり抜けていく。

心身を伴わない修練など、いくら続けても時間の無駄なのだ。

「……これじゃ、鉄の方がよっぽどましだな……」

桜の枝に喰い込んだ楼観剣を引き抜き、妖夢は自嘲と共に膝を起こした。迷いのままに振るわれた未熟な剣では、この程度の細枝も斬れないのだ。

これは鍛錬でもなんでもない。自分を痛めつけ、力の足りぬことを言い訳に八つ当たりしているだけだと、妖夢は深く嘆息する。

「……………」

“ 西行妖を咲かせてはならない ”

それが、白玉楼の庭師の勤めなのだというのなら、庭師は一体何のために居ると言うのだろう。

(師匠は、どうして——)

何も教えずに、白玉楼を去っていったのだろう。

小町はそれを妖夢のためだと言っていた。祖父を知る彼女の言なのだから、それは間違っではない筈だった。

けれど——妖夢はそれを割りきれない。

太刀 銘 楼観 (名物十夜軒楼観) 拵 明星紋松暁  
短刀 無銘 伝白楼 (迷喰 並 青楼)

白楼剣。楼観剣。白玉楼の庭師の証であり、今は妖夢のものである二振りの刀を、じっと見下ろす。

師の遺してくれた双剣に相応しい使い手となるために、妖夢は来る日も来る日もこの刀を振るい続けてきた。

——斬れば、わかる。

師の口癖だった言葉そのままに、いつか自分もその境地に立てるのだと信じて。

だが、まだ己の技量は、この刀を持つには遠く及ばないのだ。手首の痛みにはつきりとその事実を実感し、妖夢は唇を噛む。

「……結局」

欠けた月の浮かぶ夜空を見上げ、胸の中に燦ぶる想いを、吐

息と共に形にする。

「私は、師匠からなにも、教わってないんだ」

なにも言わず、なにも告げず。それまでの全てを放り捨て、姿を消した祖父の背中を、瞼の裏に思い描く。

「……………」

不意に鼻の奥に涙の気配を感じ、妖夢は慌ててそれを手の甲で擦って掻き消した。

妖忌がどういった意図でここを去ったのか、もはや妖夢に知る術はない。後を託されたと思っていた庭師や剣術指南役すら、自分へ遺された物ではなく、ただ邪魔だから捨て去った、それだけのことなのかもしなかった。

この冥界の庭と共に数百年という時を生きて、祖父はそこに何かを見出したのだろうか。無責任にも思えるその行いには、やはり深遠な意図が含まれていて、半人前の自分にはまだ理解が及ばないだけののだろうか。

剣の道を歩み、師の背中を追うには、それも必然と、呑み込まねばならないのかもしれない。

(でも……)

西行妖の傍らに在る主の姿が、妖夢の脳裏をよぎる。

永遠に訪れない春を待ち続ける、死と静寂に満ちた幽々子の儚げな後ろ姿は、妖夢の胸の中で膨らむばかりだった。

千年近くに渡り、咲くことのなかった西行妖。それを開花さ

せるため、幽々子が幻想郷中の春を集めさせたというのが数年前の春雪異変の真相だ。

異変の解決に乗り出した霊夢や魔理沙達と、妖夢は白玉楼で命名決闘法に基づく決闘に挑み、そして負けたのだ。首謀者の幽々子すらも西行妖ともども打ち破られ、春を集めるという目論見は敢え無く潰えた。

以来、幽々子はあつさりとして西行妖に拘泥することを止め、何もなかったかのように日々を過ごしている。

まるで、そのこと自体を忘れてしまったかのように。

——いや。

元来、そこそが西行寺幽々子の在り方ではなかったか。

ふわふわ、ゆらゆらと気の向くまま、何事にも深く立ち入らず、何を考えているのかも定かではないのに、結局は何もかもを見通しているかのようにも映る。

文字通り、地に足のつかない亡霊の姫。その幽々子がたった一つだけ固執したのが、あの妖怪桜だったのだ。

——ねえ妖夢。

西行妖は、どうすれば咲くのかしらね。

(……それだけ、幽々子様には大事なものであったってことだ)  
己には立ち入ることのできぬ、幽々子の絆。

けれど。——たとえ、そうなのだとしても。

（幽々子様の、あの姿を見るのが、私には辛い）

ほう、と白い息が夜の中に溢れ、消える。

たとえ、人を死に招く妖怪桜とだとしても。

それに触れることが禁忌であるとしても。

あの桜は、これかれも永劫に、あの悲しみの中に、春の訪れない冬の寒さの中に、色なき墨染に染まっていなければならぬといふまでも、言うのだろうか。

「……違う」

それだけは間違いないと、妖夢は思う。

師はおそらく、自分以上のことを理解し、その上で西行妖に触れることができたのだろう。

でも、今。ここにいるのは祖父ではない。冥界の双剣と謳われた魂魄妖気は、既にいない。

何も分からずとも、力及ばなくとも。

白玉楼の庭師は、自分なのだ。

だからこれは。これから、することは、

（私の、我儘だ——）

静かな瞑目と共に。

妖夢の手はしつかと双剣を握り締めていた。



【四】

翌日から、冥界は雪となった。

曇交じりの冷たい雨が降りしきり、春も過ぎようとするこの季節にあつて、冬の残滓が最後の抵抗を見せているかのよう。あるいは、どこかの氷精が誰かとの別離を惜しんで泣いているのかもしれない。

傍らに覺えた寒さに寢床で身を起こした幽々子は、がらんとした邸内を見回して首をかしげる。

「……妖夢？」

広い屋敷の中は、その実従者と彼女の二人暮らしのようなものだ。冥界には多くの霊が住むが、彼等は転生を待つ者たちであり、強い執着や我欲を持たない。ゆえに形を成したり声を上げたりすることも少なく、いつもふよふよと辺りを漂っているばかりなのだ。

「ようむー？」

従者の名を呼びながら、幽々子は勝手、台所、居間、縁側と順に邸内を見て回る。しかしながら、そのどこにも庭師の姿は

見つからなかった。

「どこに行っちゃったのかしら」

のんびりと縁側の障子を開いた幽々子は、降りしきる霰と分厚い雲に包まれた空を見上げる。

いつか、春を集めさせた時もこんな空だったなと思うながら、幽々子は灰色の空を見上げた。



細かい雨の中に、視界は白く霞み、遠くを窺うことは遥として知れない。雨に煙る庭の中には鋭い足音が響き、白い息が溶けてゆく。

ぬかるんだ地面を奔る靴先は泥に濡れ、疾走と共に跳ねた飛沫は靴下にまで染み入る。足の指を凍えさせるほどに冷たい雪は、しかし少女の内に滾る熱に触れ、すぐに溶けていった。

白玉楼、二百由旬の広大な庭を横切り駆けるその先に、見覚えのある姿を認め、妖夢は疾走の足を止めた。

一息、大きく白い吐息がこぼれ、また氷雨の中に消えてゆく。

「——やれやれ」

木々の狭間、空の開けた小さな広場の端、降りしきる雨に濡

れた赤毛を面倒そうに弾いて、小野塚小町は大きく肩を竦めてみせた。

「酷い雨だねえ、もう春も終わりだつてのに」

地面に広がる大きな水溜り、幾つもの波紋の上に立つて、小町は不敵な笑顔を口元に覗かせる。その腰には、帯の上から忌縁取りの死神代行証が止められている。

それは、彼女が私用ではなく、是非曲直庁の公務としてここにいることを示すものだ。

「ま、おかげで楽に入つてこれた。……元々幽霊とは顔見知りみたいなもんだから、気にするほどのこともなかったけど」

いつも通りの軽い調子の小町に、妖夢は静かに相対し、左手に持った楼観剣の鞘を、わずかに手元へと引き寄せる。

小町もそれに応じるように、脇に立てかけていた大鎌を持ち上げた。柄だけで六尺、刃も含めればその倍近い巨大な死の刃を、赤毛の死神は軽々と振り回してみせる。

水面のように、あるいは揺れる炎のように波打つ刃は、地を這うような低い位置にひたりと静止する。

「……なあ。どうするつもりだい？ あたいとしちゃあ、こんな寒い日にかつたるい公務なんかはなしにして、帰りたいんだけどねえ」

見境なく人を死へと誘うものを、冥界へと隔離し——封じる。それを決めた是非曲直庁の判断は正しいと、妖夢は思う。

喪つてしまった過去もまた、今の幽々子にあつては不要なものであるのかもしれない。それを取り戻そうとする行いを、彼等は是とはしないのだろう。

「だけど——」

「私は、生まれながらの半人前ですので。聞きわけが悪いと良く叱られます」

静かに、刀を手に。妖夢は静かに小町を見据える。それを見、やるせない笑顔と共に、小町は心底面倒臭そうに大きく息を吐いた。

「幽霊つてのは難儀だねえ」

「——性分ですのぞ」

迷いも、惑いも、一切合財全部をまとめて——この刀で斬り拓く。白玉楼を、あの幽明の桜を守る者として。白玉楼の庭師として。千年の昔より続く冬を、終わらせるために。

「白玉楼庭師、魂魄妖夢。——参ります」

白い息と共にそう言つて、妖夢は楼観剣を抜き放った。



雨が強さを増してゆく。水たまりの上、じりじりと距離を取

りながら、妖夢はわずかずつ、小町との距離を詰めてゆく。

死神が低く構えた曲刃は、踏みこんだ浮き足を払うためのものだった。分厚く重い鎌刃は、迂闊に踏みこんだ脛を払い、文字通り刈り取るに違いない。

(……遠い)

前髪から落ちる雫が、睫毛をかすめて視界をぼやけさせる。眼前の相手の一挙一動を見極め、気を反らさぬよう、頭のとっぺんから指先まで、神経を張り詰めさせる。

ただでさえ長尺の大鎌は、小町の長身も考え合わせると優に数間の間合いを持つ、妖夢の楼観剣にも負けぬ大長物だ。

小町もそれを十分に理解しているのだろう。地を這うように広がる大鎌の刃で長い間合いを制し、上中下段のいずれにも対応する、後の先を強く意識した構えだった。

表向き、死神の持つ鎌というのは制服のようなもので、実用性うんぬんよりも、訪れた魂に『死神でござい』と示すためのパフォーマンスのためのものとされている。

が、裏を返せばこの大鎌、きちんと刃の引かれた立派な実用品だ。妖夢の目でも解るほどの大業物、軽く撫でられるだけで首のひとつやふたつ、ころんと落ちるだろう

(——付け入る隙があるとすれば、その大きさ)

鎌の刃は内向きであり、それゆえに間合いには大きな制限が生じる。刃の内側で刈り取るように振るわれない限り、刃筋は

相手に届かないのだ。

見た目に反し、鎌は攻めに回ることが難しい武器であり、小町もそれは承知の上で、それがゆえに妖夢の攻め手を迎え撃つ定石を取っている。

(なら、それよりも早く——斬るまでだ)

長い間合いほど、内に潜られるのに弱い。捕えられてしまえば成す術がないが、六尺を超える大鎌を掻い潜ることができれば十分に勝機はある。

「先手必勝!!」

受けて立つとばかり、妖夢は躊躇うことなく前へ出た。楼観剣を脇に構え、身を低く、地を蹴って疾る。

二百由旬の庭を駆け巡って鍛えた庭師の脚力は、彼我の距離を一瞬で縮める。もはや縮地の域へと達した踏み込みは、跳ね上がりんとした小町の鎌の刃腹を踏み付け、その間合いの内側へと大きく喰い込む。

同時、横薙ぎに繰り出した楼観剣の切っ先が、深々と死神の胴を穿つ——はずだった。

——が。

(——遠い、っ!?)

必殺の間合いに捕えたはずの小町の身体が、ぐんと遠のく。予備動作もなしに大きく退いた死神に驚愕しつつも、妖夢はさらに深く踏み込みを伸ばし、手首を返す。

跳ねるように深く斬り返された剣尖は、しかしそれでもなお、小町の身体には届かない。さらに三、四寸は深く切り込んだはずの切っ先が、むなしく空を切る。

振り切って伸びた上体は無防備に脇腹を晒す。崩れた庭師の懷へ、容赦なく鎌が振り下ろされた。

肉に大鎌の刃が喰い込む感触を覚えながらも、妖夢は咄嗟に半霊を使って、自分の身体を斬撃と同じ方向へと弾き飛ばしていた。

どうにか、腹を真つ二つに裂かれるのだけは防いだものの、真横へ跳ね飛ばされた庭師の腹は、熱い衝撃と共に裂け、血を滲ませる。

「斬れぬものなどほとんど無い、だっけねえ？」

耳元で聴こえた死神のつぶやきに、妖夢は戦慄した。たった今、跳躍で稼いだはずの距離を無視して、翻った鎌の刃先が眼の前に迫っていた。

「っ」

反射的に身をよじると同時に、跳ねあげた楼観剣の鞘が、辛うじて大鎌の分厚い刃を防いでくれた。

斧か何かで叩き斬られたように、半ばほどで折れ飛んだ鞘を目の当たりにして、庭師の背中を冷たいものが這い降りてゆく。「……なあ。お前さん、ひよつとしてあたいが手加減してくれるとでも思ってたんじゃないかい？　だとしたら、死神もずい

ぶん舐められたもんだ」

腰の死神代行証を弾いて、小町は淡々と言う。

ぞつとするほど冷たい、刃のように細められた視線が、妖夢を射竦めた。対するものの寿命を見抜くという、死神の眼、なのだろう。

「あたいも、地獄の看板背負ってここに来てるんだ。手え抜いてるなんて思われるのは心外だよ」

そこに、サボタージュの泰斗とも評される普段の怠けぶりなどは微塵も窺い知ることとは出来なかった。

小町が無造作に鎌を振りかぶったかと思うと、次の瞬間には頭上から断頭台のように巨大な刃が降り落ちてくる。地面を穿ち断ち割る刃は、もはや防ぐ、打ち合うという段階を超えていた。

「こいつはただの鋼鉄なまくらだから、お前さんの楼観物干半剣みたいに一振りですごなんて訳にやいかないが——あたいを誰だか忘れて貰っちゃ困る。幽霊の相手は慣れてるのさ」

ひたりと、喉元到大鎌の波打つ刃が触れる。懸命に身を引く妖夢だが、躲きすることはできなかった。頸がざっくりと裂け、大きく血が噴き出す

「か、は……っ」

喉から吹き出す血を押さえ、息苦しさを懸命にこらえて妖夢は楼観剣を振り回した。小町はそれを避けることも無く、する

りと間合いを外してみせる。

（——なんて、未熟……っ）

悔しさと共に口の中に広がる鉄の味を飲み込んで、妖夢はぎりつと歯を食い縛る。この期に及んでも気が緩んでいたことに、猛烈な悔いが込み上げてくる。

——距離を、操る程度能力。

こと、小野塚小町のその能力は、格闘戦において圧倒的な優位を叩き出すのである。

相手の攻撃を受けることなく、こちらの攻撃を当てる。

つまるところ、剣術に限らず戦いの極意とは、そんなたったひとつの真理で示すことができる。

あらゆる受け攻めの手筋、攻守の型、様々な戦略、ひいてはそれらの修練、修行、鍛錬は、ごく単純なこの真理を実現するためにあるものだ。

小町は、三途の河の船頭として、彼我の距離を自在に支配する能力を持つ。それがどんな意味を持つのか、妖夢は今の今まで考えようとしてもしていなかった。

あらゆる間合いを制し、支配する死神の前では、妖夢がどれだけ速かろうと近づくことはできず、小町の攻撃は一切の距離を無視して妖夢に届くのだ。

「——そらっ」

妖夢の楼観剣を遥かに上回る大業物だというのに、小町はその長身を生かして自在に鎌を操る。

波打つ刃は剃刀のように鋭く、斧のように重い。しかも小町は曲刃だけではなく刃の裏を鎚のように、長い柄先を槍のように。乱打の中に織り混ぜてくる。

いずれも本来の鎌の用途ではなく、そのように扱うには凄まじい技量が必要となるだろう。いかな神とて、一介の死神にできる芸当ではない。

が、小町はそれをしてのけた。

——死符「死者選別の鎌」。

ぐうんと伸びる柄が槍のように楼観剣の柄を弾き、無防備になった脇腹に振るわれた鎌の背が叩きこまれる。右に抜けたはずの鎌の刃先が翻ることもなく左へとうねり、受け止めたはずの切っ先が真っ直ぐに伸びて地面を引き裂く。

それらの全てが、妖夢の知らない攻め筋だ。

波打つ鎌の先端は、鉤爪のように妖夢の服を絡め取って、地面へと引き倒す。振り回された少女の身体は、受け身も取れずに濡れた桜の幹へと叩き付けられた。かは、と肺の中身を絞り取られ、妖夢は背中を打った衝撃に息を喘がせる。

(……刃筋が、見えない……つ)

距離を自在に操る死神の前であって、大鎌は古今東西のあらゆる武器の特性を備えたかのようなだった。

得物の間合いが、剣の定石とも言える見切りが何一つ通用しない。ただの刃金であるゆえに、半人半霊の霊体の部分までを斬り裂くことはできず、妖夢は首の皮一枚で命を繋いでいるに過ぎなかった。

「く……っ」

焦りと共に、妖夢は剣気を弾幕として前方へ撃ち放つ。距離を取り、体勢を整えるための時間稼ぎだったが、小町は意に介す事も無く鎌の柄尻を地面に突き立てると、開いた左手に、袖の中からじやらりと何かを握り込む。

「宵越しの銭にするにや、ちよいと勿体ないが——」

刹那、変則的な横薙ぎの投擲で、打ち出されるのは古銭の弾幕だった。重い響きを残し、実体を持つ指弾が妖夢の額を真っ直ぐに撃ち抜く。

「っぐ、!？」

強烈な衝撃に頭蓋が揺さぶられ、視界が震える。

遠くなった意識を刈り取るように、立て続けに降り注ぐ金属の雨が容赦なく妖夢を襲う。

その額面は一銭硬貨四枚と、五銭硬貨一枚の組み合わせ。

「四銭と九銭、幽霊にや越えられるもんじやないさ」

——半分だけとはいえ妖夢も幽霊だ。三途の河の渡し賃として浄財となった冥府送りの六文銭は、成仏せず留まる幽霊には強い補正効果を持つ。ただ撃ち、貫くだけの通常の弾幕とは違い、実態を持つ弾幕は掠めただけでも服の裾を絡め、自由を奪うのだ。

銭弾の四連射が胸、頬、顎、左眼をたて続けに撃ち抜いて、強烈な衝撃を叩き込む。弾体の芯に金属を含む小町の指弾は、通常の弾幕よりも遥かに重く、鋭かった。

「か、ふ」

少女の吐く息に、血の痰が混じる。

刀を杖代わりに、倒れ込むことだけは耐えて踏み止まる妖夢。だがその視界を横切るように、ひとつ、ふたつと鬼火が灯る。

ゆらゆらと青白い光を揺らす、浮かばれない地縛霊たちの群れが、次々と妖夢の手足に絡みつき、その動きを封じてゆく。

「……どこに……!？」

鬼火の向こうに小町の姿を見失い、妖夢は焦る。気配を探ろうと周りを見回したその刹那。

地縛霊たちが一斉にはじけ飛び、閃光が少女の視界を灼く。

「——薄命『余命幾許も無し』」

静かな符名の宣言と共に。

波打つ鎌が、ざくんと妖夢の身体を断ち割ってゆく。身体だけではなく生命も、霊すら千切り斬る無慈悲な一刃が、妖夢の全身からこっそりと熱を奪い去っていった。



じくじくと腹の傷から血が溢れ、猛烈な倦怠感と共に、気力までもが流れ出してゆくようだった。

「ぐ、う……」

泥にまみれ、濡れた地面を掻き歩きながら、妖夢は懸命に身を起こす。雨に濡れた前髪が張り付く視界の向こうには、油断なく大鎌を構えたままの小町の姿があった。

赤毛の死神までの距離が、恐ろしく遠い。

どれだけ走っても、どれだけ剣を振るっても、小町にはまったく届かない。ひたすらに鍛えてきた剣の技が、何一つ小町には通じなかった。

旧都で打ち合った鬼とはまるで違う。いかなる時も威風堂々と踏みとどまり、迎え撃った勇儀とは対照的に、小町は妖夢に正々堂々と攻めさせるつもりなど毛頭ないのだ。

同じ土俵に上がることなどせず、一方的に有利な勝負で、圧

倒的に有利な手段で、構わずその大鎌で真つ二つ。

それはまた、もう一つの——弾幕こつことは良く似て、けれど違う、我意の貫き方だった。彼女はのためにここにいて、淡々と職務を全うしている、それだけだ。

それこそが生者の命に終焉を刻む、死神としての在り方なのだろう。死は多くのモノにとって絶対であり、避け得ぬ運命だ。彼女達死神の戦い方とは、つまりそういうものだった。

「もうやめな。勝負は付いたよ」

「いえ、まだ、ですつ」

まだ動ける。まだ立てる。膝を震わせふらふらと起き上がった妖夢だが、すぐにその足を小町の鎌が跳ねあげた。綺麗なほどに宙を転び、再び地面に叩き付けられる妖夢は、それでも起き上がることを諦めなかった。

——ねえ妖夢。

西行妖は、どうすれば咲くのかしらね。

(……立て。立て。……言うことを聞け、この足めつ！ 半人前でもなんでもいい、それくらいしか取り得がない身体なんだ、この程度で諦めるな……!!)

妄執でも、妄念でも、なんでもいい。何もかも道半ば、半人前の未熟な自分にできることがあるとするなら、死力を尽くす

事だけだった。

未だ遠く、力の及ばない剣だとしても、膝を折ることは、これまでの己の全てを否定することだ。

諦めなければ勝てる、なんてわけないのは解っている。

けれど、勝負において負けなかった者は、すべからず諦めなかったはずだ。

「私は未熟だから」

動かない足に喝を入れ、懸命にもぐく。身を起す。

「この剣を——幽々子様の元での毎日を、無駄だったなんて諦めるには、まだ、修行が足りないんだ……!!」

真っ直ぐに。両手に構えた二刀のまま、妖夢は小町に相対した。下段からびんと跳ね上がった楼観剣の刃が、弧を描いて小町の胸元へと迫る。が、それは死神の予想の中だった。

悠然と二百由旬を薙ぐ死神の一閃が、四尺三寸の長刀の切っ先を反らし、翻って妖夢の胸元を抉る。

「まだっ!!」

胸の傷をもとめせず、空を斬った剣撃の勢いをそのままに、妖夢は身体を一回転させてそのまま二撃めの斬り上げを打ち込んだ。振り落とされる死神の大鎌を掻い潜りながら、踏み込みと共にさらに、もう一撃。

「……………ッ」

だん、と靴底を擦り減らし、深く踏み込むとともに、ひたす

らに走る。

届かないのなら、なお速く。小町が音よりも速く離れるというなら、それよりもさらに速く。真っ直ぐに追いつき、ぶつかただけだ。

剣の鍛錬に負けないほど、朝から晩まで繰り返した、庭師の務めを信じ、妖夢は駆ける。

（私には、それくらいできないから）

迎撃の銭弾が肩を、腿を打ち抜き、妖夢の身体はぐらりと傾ぐ。だが、歯を食いしばり、息を飲み干して、前へ。

死神は、生きることを諦めた者の所へとやってくるのだ。

「……………!?!」

はじめて、小町が動揺を露にする。

纏わりつこうと押し寄せる浮遊霊の群れを、白楼剣の一閃が斬り払う。乱れ飛ぶ銭弾を、楼観剣の輝きが弾き返す。

無限に伸びる彼我の距離を、なお全力で。二百由旬を一息に奔り、渾身の踏み込みと共に前へ出た妖夢の爪先が——ついに死線を越える。

降りしきる雨雫が、少女の疾走の衝撃に弾け、飛沫となつて散る。

庭師の銀髪は残像すら残さずに、音を置き去りにした。左右に構え交差した白刃が煌き、見開いた妖夢の双眸が、宙に踊る雨の雫の向こうに赤毛の死神の姿を描えた。



地面に広がる水面に、ひととき大きな波紋が跳ねる。

「う、おおおおおおおおおっ!!」

咆哮を轟かせ、妖夢の燐気は実体をもつて、左右からの斬撃に変じて小町を襲う。これを打ち払うには一手では留まらず、ゆえに小町は鎌の柄を左右に振り、柄頭と柄尻を棒術のように扱って、斬撃を弾く。

そこへ白楼剣の切っ先が深々と突き出された。咄嗟にちか上げた鎌の刃が、迷いを断つ刃にぶつかって硬い火花を散らす。

「く」

小町が大鎌を渦のように振り回し、無数の斬撃を打ち返す。

「――そうか」

繰り出される鎌の連撃の中、妖夢は喉から気合いを叫びと共に絞り出し、ありったけの速さで小町の懐へと斬り込んでゆく。

「っ、ああああああ!!」

――人鬼「未来永劫斬」。

際限なく加速する身体とは対照的に、思考は恐ろしく冷静に、どこまでも澄んで研ぎ澄まされていた。

「――考え違いを、していた」

距離を操る、そのことだけに囚われて、いくつかの大事な事を見落としていた。妖夢は小町的能力を恐れるあまり、その本

質を見失っていたことに気付く。

まずひとつ。絶対的な間合いの支配者が、そのまま戦局の支配者ではない。

小野塚小町が操れるのは距離だけだ。どれだけ離れていようと狙うことができるが、その攻撃そのものが変質しているわけではない。

むしろ振るうのが身の丈を超える巨大な鎌であるがゆえ、その刃筋はどうしても大雑把なものにならざるを得ない。振り下ろすか、薙ぎ払うか、その二択だ。

どれだけ離れていようとその斬撃は届きはするが、それもあるにとつともなく長大な武器を振るっているだけのことで、小町が鎌を振るう、その予備動作自体は十分に察知できる。

そして、刃筋が見えれば、避けられる。

距離を取るのではなく、伸びゆく刃筋を避ける。後ろに退いても前に出ても距離を操作できる小町には意味がない。繰り出される斬撃を線と捕え、そこから身を外すのだ。

一里離れていても届く刃だとしても、その軌道が見えていれば、その刃筋を外しさえすれば当たらない。

――さらに、

「――断迷剣『迷津慈航斬』!!」

練り上げた剣気を纏わせ、巨大な刃渡りとなった楼観剣を、晴眼に構え、渾身の力で振り落とす。後を考えぬ大振りの一撃

に、小町は幸いと距離を取った。

だが、妖夢の狙いは彼女本人ではない。地面に叩き付けられた楼観剣が大きく地を穿ち、雨に緩んだ柔らかい土砂を巻き上げて、泥の遮幕を生んだ。

「——ちい、っ」

妖夢の研ぎ澄まされた聴覚が、小町の舌打ちをはっきり捕えていた。

（これが、ふたつめ）

距離とはつまり、二つのもの間の間を示す指標だ。狙う相手の姿が見えなければ、そことの距離を測ることはできず、操ることも不可能となる。

反射的に小町が繰り出した鎌の切っ先は、これまでの精度が嘘のように間合いの甘くなったものだった。目分量で振るわれた鎌の柄を、妖夢はなんなく柄頭で受け止める。

「まずった……!!」

顔をしかめ、錢弾を撒きながら後ろ飛びに退る小町を、妖夢は真っ直ぐに追いかけた。

逃げる小町、追う妖夢。もはや戦局を支配するのは、二百由旬を自在に駆け巡る庭師の俊足一つ。

（……そして、これが三つめ）

小町の姿を追いながら、妖夢は理解する。こんな時でも妖夢に背中を見せることなく、死神はじつとこちらを向いていた。

彼我の距離を操るためには、常に、闘う相手から視線を切らず、姿を視界に納めていなければならない。ずつとずつと、片時も眼を離すことなく。真摯に向き合い続けているのだ。

普段の職場でもきつとそうなのだろう。

小野塚小町は、お人好しで、世話焼きなのだ。

絶対的な距離を支配し、一方的に勝負をつけようとするのもその裏返しだ。不用意に近付いてしまえば、情に絆<sup>ほだ</sup>されると分かっているから。

（でも——）

さらに速度を上げる妖夢を見、小町はついに足を停めた。離れても追いつかれると悟ったのだろうか。或いは——受けて立つてくれたと思うのは、自惚れだろうか。

赤毛の死神は、片手に持った六尺余の大鎌を、風車のように凄まじい勢いで回転させ始める。たちまち竜巻のように「こうこう」と風音を切つてうねる大鎌を、小町はその勢いのまま思い切り薙ぎ払う。

——魂符「生者流離の鎌」。

ありったけの力を載せて、二百由旬を薙ぎ払う死神の一閃が、走る妖夢の真正面から繰り出される。半人半霊の少女を、真二つに引き裂かんとする無慈悲な断頭台。

だが、それもはや——意味を持たない。

優しすぎる死神が振るう、大鎌の射程の内側に潜り込み、妖夢は白楼剣で鎌の柄を弾き止めた。さらにそこへ楼観剣を缺のように噛み合わせ、がきりと、小町の大鎌を挟みこむ。

「そして、これが最後のひとつ!!」

零は何倍しても零なのだ。どれだけ距離を操ろうと、小町の鎌がこちらに触れている、その事実が変わらない。

死神の大鎌を受け止めたまま、妖夢はありつたけの力で足を踏み込んだ。

変則的な鏢迫り合いの体勢で、噛み合った鋼が火花を散らし、重く軋みを上げる。拳打で言うところの寸勁の技法だ。

触れ合ったままの刃が深くねじ込まれ、重ねた二刀が両側から小町の大鎌へ斬り込んでゆく。

### ——結跏趺斬。

迷いを断つ白楼剣と、妖怪を斬る楼観剣。白玉楼の従者の証しである二振りの刃が、まるで缺のように噛み合い、絡め取った大鎌を叩き折った。

跳ね飛んだ大鎌の刃が、がらんと地に転がり落ちる。

その時には、妖夢の身体は小町の内懐、胸元へと肉薄し、死神の身体を地へと叩き伏せていた。



「……あーあ。参った参った」

力の入らない手足を地面に投げ出し、降りしきる雨に打たれるがまま、小町は小さく息を吐いた。

濡れた前髪を掻きあげて、頬を打つ雨雫に目を閉じる。

剣を納め、深々と一礼して走り去っていった庭師の少女の背中へ、既に霞みの向こうに消えていた。

空はいまだに分厚い雲に覆われて薄暗いが、降り続く雨はもう凍ってはいなかった。

「割に合わないと思ったらないよねえ。妖忌の奴が下手に格好つけるからとんだ貧乏くじだ。今度会ったらただじゃおかないよ。」

……四季様に叱られちまうかなあ、こりゃー

小さく笑いながら、小町は独白を続ける。敗北のあとだというのにその表情はどこか爽やかだ。

——あるいは、これが彼女の望む結末だったのだとも言えるように。

「因果な商売だよ、死神ってのは。……長くやってりややってるだけ、死んで欲しくない奴が増えちまうんだからね」

特にこの幻想郷<sup>ザンドワ</sup>じゃ尚更だと、自嘲するように微笑んで。小

町はもう一度、妖夢の走っていった方へと視線を向ける。

「上手くやりなよ、妖夢」

もう見えないその小さな背中に、死神はそつと声援を送って、眼を閉じた。



雨はなお続き、二百由旬の庭と共に西行妖を濡らしていた。

頬に感じる傷から、血が雫となって溶けだしていくのを感じながら、妖夢は枝を濡らす西行妖へと向き直る。

「……………」

少女の姿と言えば、もはや満身創痍もいいところ。全身至る所に刃傷があり、手足にも殆ど力は残っていない。全力の立ち合いがもたらした濃い疲労の中、走るのもやつとの身体を引きずってここまで辿り着いたのだ。

そこには、濃い雨の中にも薄れる事のない、強い死の気配が満ちている。

千年に渡って冬の中に隔離された桜は、やはり孤独の中にあつた。曇天の下、色を失い、薄墨に塗り込められたかのように

黒々と聳える古木を、妖夢はじつと見上げる。

「——」

目に見えぬ怨嗟が咆哮を上げ、人を招き死に寄せんとするかのような威圧感を前にして、庭師の半分だけ人間の身体も悲鳴を上げる。

この桜を、死の象徴としたのは誰なのだろう。その美しさに魅入られた人々だろうか。怖れて遠ざけた者たちだろうか。望み果てて命を絶った者たちだろうか。遠い春の中に幽明の境を分かった歌聖だろうか。

今は窺い知ることのできぬ古桜の歴史に想いを馳せ、妖夢は静かに目を閉じた。

既に力なく震える指に、啞えた晒しをきつく巻き付け、楼観剣を、白楼剣を縛り付ける。

「——西行妖」

主と共に千年を優に超えてきた、物言わぬ妖怪桜の名を、敬意と共に呼んで。

「……私も、貴方の傍に居る。だから——」

静かな覚悟と共に、妖夢が振るった刃は。

少女の誓いの言葉と共に、ざんと振り下ろされた。

【終】

季節は巡り、いまや五月も半ばを過ぎようとしている。初夏の装いに染まる冥界には、避暑を求めてやってくる顕界の者たちが後を絶たない。対応に追われる幽霊たちが忙しく走り回っている、そんな冥界の片隅。

夏へ移り変わる季節の中に彩られた白玉楼の廊下で、少女の声が響く。

「あの、幽々子様っ」

「ん、なあに？」

呼び止められた幽々子は、まだ怪我の痕も生々しく、包帯に膏藥をあちこちに張りたくったままの妖夢に眉を潜め、

「……相変わらずボロボロねえ」

「え、あ、はい……申し訳ありません」

困ったように頬を赤くし、俯く妖夢は、しかし意を決したように視線を上げる。

「？」

幽々子が首を傾げる。言いたいことは山のようにあるはずだ

った。しかし胸の奥で熱いものが滾り、渦を巻いて喉につかえたように言葉が出てこない。

「……………こ、これを」

妖夢は顔を伏せるように、両手に抱えていたものを突き出した。震える喉で、なんとかそれだけを口にする。

「あら。今日は誰かのお祝いの日だったかしら」

差し出されたのは彩り鮮やかな和紙の紙包みを見て、幽々子には不思議そうな顔をする。

そっと触れてきた主の冷たい指に、妖夢はその場に飛び上がりそうになる。

「っ……」

「開けていいのかしら？」

細い指が折り重ねられた飾り和紙を解いてゆく。

包みの中から現れたのは、一枚の桜色のスカーフだった。ふわりと春霞みの香りすら漂わせるような、色鮮やかな春の彩りに重ねて、幾重にも桜の花の刺繍も施されている。

「……………」

幽々子が息を飲むのを、妖夢ははつきりと感じていた。

これは、西行妖の枝を使って織り染めた桜染だった。

桜は春を前に、その開花のための色を幹に、枝の中に蓄えるという。千年以上も開花することなく春を待ち続けていた西行妖の枝には、妖怪桜が千年以上の冬を経て、蓄え続けた桜の色

が、溢れんばかりに詰まっていたのだ。

魔理沙に紹介された人里の染師は、人を呪う妖怪桜の枝だということを知り、なお嫌な顔一つせずに染色の手伝いを引き受けてくれた。

スカーフを染めるのはほんのごく一部の春。けれど、これは間違いない、幽々子が求め続けた桜の色だ。

「……勝手なことをしました。どんな罰も受ける覚悟です」

己の傲慢のままに西行妖と、幽々子と。触れてはならない絆に踏み入ってしまったことで、妖夢はどんな叱責を受けるかもしれないことを覚悟していた。

けれど。それでも。

「——私、はつ」

きつく噛み締めた唇は、辛うじて声をあげないようにするの  
で精一杯。これに必要な勇氣に比べれば、死を踏み越える覚悟  
なんて、笑いたくなるほどに些細なものだ。

「……………」

長い、長い沈黙があった。

小町と対峙した時よりも遙かに強烈な緊張に、妖夢はひりつ  
く喉に唾を飲み込む。

「ゆゆこ、さま——」

「……ねえ、妖夢」

ふいに降り落ちた主の言葉に、妖夢はびくと背中を竦ませる。

反射的にぎゅっと目を閉じて、全身を氷のように強張らせ少  
女の姿の前に、鮮やかな春色のスカーフを手に取って、幽々子  
はそっと妖夢の髪へと手を伸ばした。

ひやりと細い指先が、数度、妖夢の銀髪をくすぐるように動  
き——すぐに離れていった。

「これで、これからはいつでも桜が見られるわね」

幽々子はいつものように、ふんわりと微笑んだ。

「え、あ……」

呆然と、自分の髪に手を伸ばし、そこに結ばれた桜染めの春  
を確認して。妖夢はくしゃりと表情を歪ませてしまった。

いけないと思うが、高鳴る胸の熱さはおさまらず、揺れる目  
元から、熱い雫が頬へとこぼれ落ちる。

「あらあら。どうして泣いてるのかしら、妖夢は」

「つ……、だ、だつて……つ、」

「……本当に、頼りないわねえ。妖夢は」

くすぐすと微笑んで、幽々子は幼子をあやすようにそっと妖  
夢の髪を撫でる。

いとおしむ様に、慈しむように。

——ずっと傍にいなさいね。

さあ、と吹き抜ける初夏の風に、桜染めの春がさらさらと揺

れた。そつと自分の髪を払いのけ、幽々子は庭の向こうへと視線を向ける。

「ねえ妖夢。今日のお昼は、外で食べましょうか」

「……はいっ」

もはや、この冥界に冬は残っていないことをはつきりと感じ。妖夢はとびきりの笑顔で頷いた。

(了)





## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

銅おりはと申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『華胥の櫻、墨染の君』は、西行妖の手入れをしようと悪戦苦闘しながら、恋に仕事に頑張る白玉楼の庭師の日々を描いた、当サークル十四冊目のSS本となります。

神霊廟で再び自機に抜擢された半人半霊の庭師の魅力が、伝えられていれば嬉しい限りです。

今回、第二版と一緒に並んでいます前作『魂魄妖夢鬼退治』では真っ直ぐ迷いなく鬼と戦う妖夢のひたむきさをテーマにしましたが、本作では妖夢の半人前ゆえの悩みや、従者という立場ゆえ踏み込むことを躊躇うことへ一歩を踏み出そうという部分を取り上げてみました。前作とはまた違った色合いが出せたかな、と思います。

実際は、幻想郷のあれこれ、もつとお気楽のような気もするんですけど、これでも。

さて、今回、いつも以上にスケジュールに苦戦し、白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願つ。

## 【奥付】

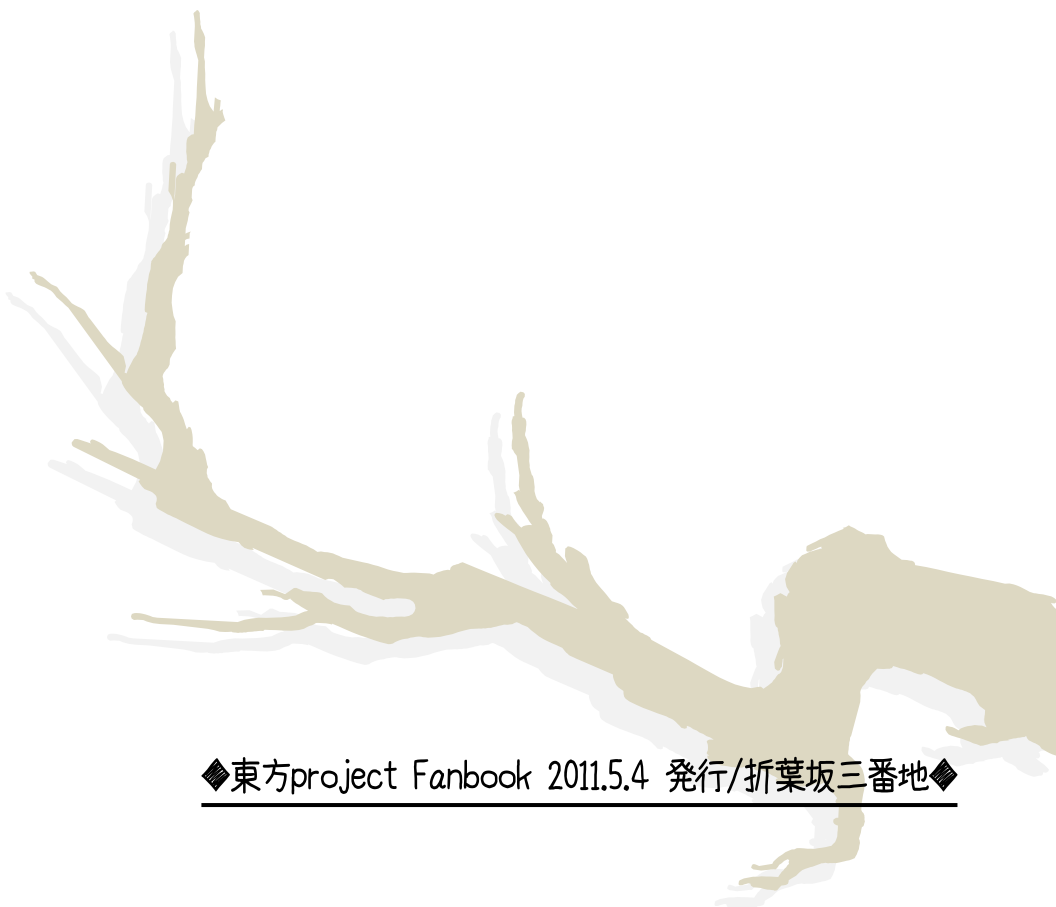
「華胥の櫻、墨染の君」

平成23年5月4日 幽明樓に

発行 折栗坂三番地オレンザカサンバンチ  
著者 銅おりはオウガハ  
(<http://onhazakablog28.fc2.com/>)

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。





◆東方project Fanbook 2011.5.4 発行/折葉坂三番地◆

